

注意に関する十二箇条の論題

また風音が聞こえる時は、たったそれだけで生まれ
てきた甲斐を感じる。人がこれを読むとどのよう
に思うかは判らないが、無力に思い付くものだから、
良く思われる気がする。

その一、物や人の目覚しい現実、これこそが真の注意の対象である。

その二、真の注意は、出現の所作をする。物や人の潜在性を顕にする隙間である。単なる注意すなわち通常の気配りは有用であり、世界に対しては、整然たる家屋の融通が効く扉を開閉したり出入りしたりするかのようなことである。ただし混じりのない注意は、すなわち無益なもの、誰しも欲しないもの、知識や利益をもたらさないものに対する純粹な注意は、壁を貫通するため、扉を要さない。

その三、物へ向けたこうした真の注意は、必然的に他者の存在を顕にする。

その四、真の注意は、存在すると認められたものや注意に値するものの覇権や、日常の重力により、しばしば妨げられる人間関係と交流に潜在する可能性を、開花させて繁栄させる。通常中断される人間の創発的集団形態を養う。

その五、注意経路は、自由な精神が残す形跡。他者の注意経路に従うことすなわちそれを辿ることは、注意の形のひとつである。自由な精神の注意経路を辿るのは、世界と他者と共に堪能し得る至極の愉しみのひとつである。

その六、この意味においては、注意の自由の弁証論を認めるべきである。真の注意は、自我が他者の注意経路に従い得るか否かにかかる。それゆえに注意の不自由は、自由の如くすなわち無限の勧誘に感じられ、また注意の自由は、不自由の如くすなわち故意の服従に感じられることがある。

その七、この弁証法は、ますます真の注意が不可能なまで市場や技術により、故意に操作されてきた。今日ほど注意が自由な時代はないと思いきや、それが常に囚われているのが現実である。すなわち注意の環境は破滅している。真の注意は存続の危機にある。

その八、こうした注意の悪夢から目覚めることは、単独の事象としては展開されまい。真の注意の実践は、それが生存し繁栄し得る空間、すなわち新たな環境を開拓することを要する。これは具体的に新たな集会形態を可能にする空間の創出として現れ得るが、個々人が内外の生活の関係を強化することも不可欠である。個人として感性的経験を他人と共有することは、個人として考えたり望んだりすることが常々破滅しかねない世界と調和させる手段のひとつである。

その九、こうした真の注意の「聖域」は既に存在しているが、危機的状况にある。そのため寛容で包括的に自立しつつ儂く潜んでゆく形で働く。この聖域を見出すことは可能だが、注意の努力を要する。またこの追求行為は注意の自己治療法である。こうした追求する注意は、予想・期待されるものを知るのを拒む、猛烈で信心深い予想・期待として現れることがある。

その十、求むべきは注意の倫理である。これは実用的神秘主義のようであり、実用的神秘主義は非実用的なものではない。功利や審美の判断と混じらず、変形させる把握の手・眼・意に囚われず、純粹注意によって物の目覚しい現実に迫る努力に他ならない。

その十一、真の注意は生活の不能を可能にする。呼吸することによって酸素を補充する肺のようなもの。居る場所で生息できると突如感じたならば、それは誰かが意を尽くして意を汲んで意を注いだためである。これは我々の仕事である。

その十二、この仕事は自由と理解の仕事であり、注意による世界創造の仕事であり、根本的に政治的な仕事である。